
俺の名前は洵と書いて『ジョン』と読むらしい。

零・ZA・音

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の名前は渾と書いて『ジョン』と読むらしい。

【著者名】

Z0684C

【あらすじ】

幼なじみの美咲は犬が大好き。そして子供のある出来事から俺は『ジョン』と呼ばれるようになった。俺達の関係は特別変ではないのだが、一応は俺にも渾つていう立派な名前があるわけで……色々と複雑な毎日を送っているとある一日の出来事。

(前書き)

企画小説「名小説」他の方の作品は「名小説」と検索すると読む事が出来ますので是非、ご覧ください。

名前っていうのはどんなものにも等しくあるもの。

名前が無ければ呼ぶ事も出来ないし、「あれ」とか「これ」では人に通じるわけもない。

だから俺にも名前はある。親が付けてくれた立派な名前が俺もあるのだが。

朝の清々しい日差しを浴びて背伸びを一つ。窓辺に立ち、優雅にカーテンを開けて窓を開ける。この一連の動作は小さい頃からの習慣で今でも続くものだ。

「う、ううん……気持ちいい朝だな

窓枠に手を置いて外を見ると涼やかな小鳥の鳴き声が聞こえてきた。春が終わって夏が来ようとしている季節つていいよな……自然と気持ちが踊りだすっていうか、開放的になつてくる。

「おーい、ジョンっ

さて 時間もない事だし、さつさと着替えてご飯でも食べるとするかな。

「こりつ、無視するな

「……ちつ

「うわっ、舌打ちしてるよ、ジョンの分際で」

「こいつは……清々しい朝が台無しではないか。いや、俺の人生が台無しになつているではないか。

「美咲っ、俺の名前は渾だつて何度も言つてるだろ」

「ジョンはジョンだよ。それより おはよつ、ジョンっ

まったく俺の話を聞こうとせずに人懐っこい笑顔で手を振つている美咲。こいつは隣の家に住む幼なじみの近藤美咲で、一応は一年下の高校一年生。見た目はとても可愛らしく美少女で学校でも評判になつていい。俺としては色々と複雑な心中なのだが、部屋が真

向かいで朝起きればこうして顔を合わせるのは至極当然の存在になつてゐる俺に対しては”遠慮”と”配慮”という言葉がまったくない。『我輩辭書に……』って言つたあの英雄もこんな感じだつたのだろうかね。

それから、窓枠に足を掛けて立膝は止めよつね……色々と見えてるから。

「ほら、早く着替えて学校行こうよ」

「窓から入つてくるなつて、何度も言つてゐるだろうがつ」

窓枠に足を掛けてこちらに渡つて來た美咲は我の顔で部屋に上がり込んでいた。隣との距離、わずか五〇センチ……何も景色が見えてこない我が家の作りを何度恨んだ事か知れない。

「ジョン、早く着替えてよ」

「……お前がいたら着替えられないだろ?つて」

「私はジョンの裸なんて見飽きた にやあつ」

「世間様が誤解するような事は言わないように」

丁寧に首根っこを持つて部屋の外に連れ出し、廊下に投げ捨てる。見上げて俺に抗議の視線を向けている美咲は両手を振り乱して「暴力反対つ、ジョンのばーかつ、アホつ」

「黙れ。本当に裸、見せるぞ」

「きやーつ、変態がいる」

大声で喚きながら階段を下りていく美咲をため息を吐きながら見送り、俺はジャージを脱いだ。

そもそも、俺が『ジョン』と呼ばれるようになつたのは小さい頃に見たテレビ番組が原因である。それは可愛い子犬やら子猫やらが登場する『ご定番の動物番組』で、動物が好きな美咲のお気に入りの番組でもあつた。その日は俺の家と美咲の家とで家族揃つて仲良く夕食を食べて食後の団欒をしていたのだが、テレビ画面を食い入るように見ていた美咲が「ワンちゃん飼いたい」と突然言い出した。当然、美咲のお母さん(俺から見れば、おばさん)は「駄目よ」の一言で済ませただけど、その瞬間、駄々っ子のスイッチが入つたよ

うで泣き喚き、暴れ散らし、手当たり次第にものを壊していく暴君と化してしまった。そうなると手が付けられない美咲に何を思つたか、うちの母さんが「それなら、洟をあげるわよ」と言い出した。それにおばさんも加わつて「それなら『洟君』って言つより、『ジョン』つて方がピッタリね」と、一人で爆笑しているのを呆然と見ていた俺の肩を父さんとおじさんに叩かれて無言で頷かれたのを今でも鮮明に覚えている。

それからというもの美咲は俺を『ジョン』と呼び、両親達も面白半分に一緒になつて呼ぶので、すっかり定着してあだ名のようになつてしまつた。俺は犬じゃないつていうのに……。

空から降り注ぐ有害物質を含んでいるあらう太陽光線を全身に浴びて学校へ向かう俺達。

……皮膚ガンとかになつたら誰に訴えたらいいんだろうか？

そんなどうでもいい事を考えながら歩いている俺の隣をトコトコと走いてくる美咲。俺よりも一〇センチほど低い美咲では俺の歩幅に合わせるのは大変な事だらう。

「ジョン、ストップ」

「……」

「無言で反抗とはいいで胸だよ。そこにお座り」

小走りに俺の前に廻り込んで指を俺に突きつけて、そのまま下を指差す美咲。丸つきり犬扱いだな……しかし、天下の往来でお座りなんて出来るかつて話だ。不満そうに唇を尖らせて眉を吊り上げる美咲の顔をじつと見つめ返すと、頬を赤く染めて恥ずかしそうに顔を逸らして俯いてしまつた。

「わ、私の顔なんか……じつと見ないでよ」

「別にいいだろ？ 每日見ているが飽きのこない顔つていいよな」「ど、どういう意味よ」

更に不満そうに唇を尖らせて睡を飛ばしそうな勢いで思いつく限

りの罵詈雑言を俺に浴びせている美咲。

と、言つても「バカ」だの「アホ」だの……子供が思いつくような事しか言わないのが可愛いのだがね。

……こつこつところが飽きないんだよな。

なんて言つたら絶対に怒られるだろ? 現に怒つておこづか。現に怒つておこづか。

「ほれ、学校遅れるぞ」

苦笑しながら美咲の頭に手を置いて一足先に歩き出した俺のうしろで

「むつ……ジョンのアンポンタンつ。お座りつたら、お座りなのつ」

一瞬、顔を赤らめていた美咲が大声で喚きながら近づいてきた。

今時、アンポンタンはないだろ? つて。

休み時間。

教室で友達とくだらない話（主に下ネタ）で盛り上がり上がっていたところをクラスメイトの女子に呼ばれたのでそちらを向くと、開け放たれたドアから申し訳なさそうに顔を出した美咲がいた。何事かと思い、近づいていくと隠れるようにドアから顔を引っ込めてしまつた。何がしたいのか、何をしに来たのか、さっぱり分からぬヤツだな。

「何の用だ？」

「ジョン、ちょっと来て」

有無も言わさず俺の腕を引いて歩き出した美咲に、教室の中からは「頑張れ、お兄ちゃん」やら「狼になるなよ」やら、言いたい放題の声が聞こえ、その中に呪詛のような言葉も聞こえていた。お前等、俺を呪い殺す気かよ。

……。

無言で前を歩く美咲に連れられて着いた先は体育館の裏だった。まさか、今から不良が出てきて俺を袋叩き……ありきたりだが実

際にその場に直面したら怖いだろうな。この学校にも一応はそれらしき面々がいるが、美咲とは知り合いではないだろうし、第一俺はいつも美咲といるので友達関係は熟知しているつもりだ。まあ、男友達が近づいてきたら軽く威嚇しているのは美咲には内緒だけど。

「……ジョン」

「お、俺を襲つても面白い事なんてないぞつ」

「何言つているの？ 別にジョンを襲うつもりなんてないよ」

身構えた俺を哀れな顔で見つめ、その場にしゃがみ込んだ美咲の足元で小さな毛むくじゃらの物体が動いていた。

「……子犬？」

「そう、可愛いでしょ？ あ、こら……くすぐつたよ」
小さく鳴き声を上げて美咲の指を舐める子犬を見つめて、美咲は優しく笑みを浮かべていた。

「どうしたんだよ？ その子犬」

「さつき、体育の時間に見つけたの」

子犬を抱きかかえて俺を見上げる美咲は眉尻を下げて何かを訴えかけてくる。しかし、その”何か”は俺には分かつてるので美咲に気付かれないように小さくため息を吐いた。

また始まつたか……小さい頃から動物が好きで、中でも部類の犬好きの美咲にとって『犬を飼う』のは長年の夢なのだ。しかし、どうして家では飼えない理由というものがあつて、それが美咲を苦しめている事も知っている。

「おばさん、アレルギーだる。また、喘息起こしても知らないぞ」「そんな事は分かつてるけど……」

悲しそうに瞳を伏せ、子犬の頭を撫でている美咲もその事は分かっている。おばさんも「私がこうじやなければ飼つてもいいんだけどね」と申し訳なそうにこぼしていたが、犬が近寄つただけで酷い喘息が出てしまうので実際に飼うのは無理だろう。

「でも、かわいそうだよ」

「確かにそうだが、連れて帰る事は出来ない」

今にも泣きそうな顔で俺を見つめる美咲だが、こればかりはビックリもない。

これは誰からも頼まれた事ではないが、もつあんな思いをするのは嫌なので心を鬼にして突き放す必要があるのだ。

「ほら、授業が始まるから教室に戻るぞ。それから、ちゃんと毛は払っておけよ」

「分かつてるよ……じゃね、ワンちゃん」

鼻をすすりながら子犬を下ろしていく美咲は勢いよく立ち上がる
と、何も言わずに歩き出した。すると置いて行かれるのが分かつた
のか、小さくすがるような鳴き声を上げている子犬を一度振り返っ
てそのまま駆け出して校舎へ入ってしまった。

……あそこまではしないと離れられないのか。

犬好きも極まると大変なんだと思いながら、俺の足にすり付いて
きた子犬に苦笑いを浮かべていた。

放課後。

美咲の様子が気になっていたが昼休みも別段変わった様子もなか
つたが、それでも一応は気になるので一年の教室まで行ってみると、
すでに帰つたと言われてしまった。

まさか……そう思い、体育館裏まで行つてみたがそこには美咲の
姿はなかつた。ついでに子犬の姿もなく、嫌な予感が頭を過ぎつて
いく。

「…………」

大きくため息を吐いて美咲の行きそつな場所を考えたみたけど、
思いついたのは一箇所だけだった。

夕焼けが空を赤く染める中、俺は目指す場所に到着していた。

学校と家の中間ほどにある小高い丘の上にある公園で、夜になると眼下に広がる町並みが綺麗な絶景スポットである。まあ、そのお

かげで夜はカツプルが多くて色々と大変な場所らしい。

そんなに広くない公園を進み、美咲がいるだらうと思われる場所へ一直線に目指していく。

「……美咲」

案の定、そこには探していた人物もいた。

ベンチに座り、目の前に広がる町並みを眺めていた美咲は、いきなり名前を呼ばれた事に驚いて慌てた様子で振り返った。小さく「あっ」と声を上げて少し涙目になつている美咲の顔は強張つていたが、俺だと分かるとすぐに表情を緩ませて目元を拭つてはにかんでいた。

「何してんだ、美咲」

「……何も」

酷く落ち込んだ声で俯いた美咲はそれっきり何も喋ろうとはせず、ただ時間だけが流れていく。これもいつもの事で俺は美咲の隣に腰掛けた話し掛けてくるのを待っていた。

美咲は今日みたいに子犬を見つけた日は、こうして一人になつて自分を落ち着けようとする。連れて帰つても飼えない苦しみをどこにぶつけていいのか分からないのだろう。

子供の頃に美咲は一度だけ子犬を黙つて家に連れて帰つた事がある。そのときは俺も一緒だつたのだが、すぐにおばさんにはれてしまつた。しかし、おばさんは「一度も捨てて来なさい」とは言わず、美咲と俺に自分はアレルギーがあつて犬はおろか動物が飼えない事を分かり易く説明してくれた。だが、話の途中で急に咳き込み始めたおばさんは倒れてしまい、俺は急いで家から母さんを連れて來たので大事には至らなかつた。安心したのも束の間、今度は喘息の发作を起こしたおばさんを見た美咲は自分のせいだと思つたようで、一人で勝手にいなくなつていた。みんなで大騒ぎをしながらあちこちを探していたら、この場所で泣きながら子犬を抱きしめている美咲を発見した。

その姿を見たとき、俺は心が酷く痛んだ。美咲を始めて意識した

のはあの動物番組を見ていたときだ。それまではうるさいだけの女の子だったのだが、あのときに見た笑顔で一発で虜になつていて。それからは時折見せる可愛らしい笑顔に心がときめいて、ますます好きになつていて、自分に気付いた。そんな大好きな女の子が悲しんでいるのにどうする事も出来ない自分が嫌で堪らず、そつと手を握つてあげる事しか出来なかつた。でも、俺の手を握り返して優しく微笑んでくれたのを今でもはつきりと覚えている。

「あまり遅くなつたら、おばさん心配するぞ」

「…………うん」

暫く流れ行く雲を眺めていたが一向に話し掛けてくる気配のない美咲に違和感を覚えた。いつもなら話しかけてくる頃合なのに今日はやけに長い。じつと下を向いたまま、唇を真一文字に結んだ美咲の横顔は言葉にするのが難しいほど暗く落ち込んでいる。

「そんなに犬が飼いたいのか？」

俺の声に迷いなく頷いた美咲はゆつくりと顔を上げていた。

目元を拭つてまっすぐに俺を見つめている美咲は「ごめんね」と小さく咳き、俺の肩に寄りかかってきた。ふわりと舞う髪が首筋に触れ、シャンプーの香りだろうか、いい匂いが鼻をくすぐつていく。

「ど、どうした？」

「ちょっとだけ……ね」

俺はいつもとは違う美咲の行動に慣れだしそうな心臓を落ち着けるのに必死で、裏返つてしまつた声に更に落ち着きをなくしていた。「ちょ、ちょっとだけだからな」

「分かつてるよ……ケチだね、ジョンは」

虚勢を張つて言ってみたが苦笑交じりの美咲には全てを見透かされていいるようで恥ずかしい。夕日に染まる俺達は赤くなつているとと思うが、それ以上に俺の顔が真つ赤に染まつていてるだろうな。

どれくらいそうしていただろうか、不意に肩から重みが消え、顔を上げてみると美咲は立ち上がり背伸びをしていた。

「……帰ろっか」

振り返った美咲は今までの暗い雰囲気をどこかに吹き飛ばすような満面の笑みを浮かべていた。その変わりよう俺は言葉を失つていたが、優しく笑みを浮かべる美咲を見惚れていた。

……この笑顔が好きなんだよな、俺は。

「あ、ああ……帰るか」

出来れば今すぐ抱きしめてしまいたい衝動に駆られているが、そんな事をすれば変に思われるだろうし、ここは冷静に対応しなければいけない。

「でも、ワンちゃん可愛かったなあ」

「そうだな。確かに可愛かつたな」

歩き始めた美咲は思い出すように宙に視線を彷徨わせて口元を綻ばせているが、俺には無理をしているのはすぐに分かった。長い付き合いだから、どんな顔をしていても分かつてしまふのは俺も同じだろうな。

でも、そんな美咲を見ているのが辛くて

「犬が飼えなくて、その間は俺がいくらでも代わりをしてやるよ」

俺は意味不明な事を口走つていた。

「……え？」

「いや、えっと……今のは忘れてくれ」

田を見開いて驚いている美咲は夕田に負けないくらいに頬を赤く染めて俺の顔をじっと見つめていた。そんな顔で見つめられていは冷静になろうと思つていたのに冷静になれるはずもなく、照れ隠しへ乱暴に美咲の髪を撫でていた。

「も、もう、何するのよつ」

「つるせえよ……ほら、帰るぞ」

ぽんつと美咲の頭を一回撫でて足早に歩き出した俺のうしろからパタパタと足音を響かせてやってきた美咲は、朝と同じように俺の前に廻り込んで

「ね、ねえ……今のつて、ジョンがワンちゃんになつてくれるつて

」と？今までみたいにずっとそばにいてくれるってこと？

指を突きつけていた。

真っ向からそう言わると恥ずかしくてどう対応していいのか、さっぱり分からなくなり

「いや、まあ……寂しいときはいつも相手してやるって意味だよ更に意味不明な事を口走っていた。

どうにも今日の美咲はいつもと違うので調子が狂ってしまう。俺も変な事ばかり口走っているし、やっぱりおかしいよな。別に犬になろうってわけじゃなくて、美咲の寂しい気持ちを紛らわすためならそれくらいの事は出来るって意味なのだが。

「も、もういいだろ。それより、帰るぞ」

言葉に出来ないのか俺を見つめている美咲はわずかに震えていた。泣いているのかと思ったが、次の瞬間

「あははっ……ジョンってば、似合わない事言ってるよ」

その場にしゃがみ込んでお腹を押されて笑い出した。

「だあっ、うるせえよ」

俺はこの場から走つて逃げたいほど恥ずかしい気持ちでいっぱいになり、ぶっきらぼうに言い放つと先を歩き出した。うしろから「ちよつと待つてよ」と美咲の声が聞こえてきたが無視して歩いていると、声は途切れで聞こえなくなつた。少し大人げなかつたかな（一応は年上なので）と思い、うしろを振り返ると美咲の姿はなかつた。

「あ、あれ……美咲？」

「こつちだよ」

不意に聞こえた声はうしろからで、俺は声の方へ向くと

「いつも、ありがと」

その言葉と共に柔らかい感触に唇を塞がれていた。

「さて、帰らないとお母さんがうるさいからね」

何が起こった思考が停止した頭で考えても分からない。ただ、軽く触れただけの唇から感じた温もりと甘い香り。

「……俺、キスされたのか？」

「いつまでぼーっとしてるのよ、ジョン！」

照れ隠しなのか真っ赤に染まった顔で声を荒げている美咲は歩き出そうとしたが立ち止まり、俺に手を差し出していた。

「え、あ……」

一体、何なのか分からぬ俺は手と美咲の顔を交互に見比べて困惑していると

「ジョン、お手つ」

大きな声を出したので驚いて反射的に美咲の手に自分の手を置いていた。

「それじゃ、帰るよ」

有無を言わさず、俺の手を掴んで歩き出した美咲に引っ張られるようにうしろを付いて行く俺。夕焼けの中、長く伸びる影一つの影は一箇所だけ繋がっていた。てのひらから伝わる美咲の鼓動に俺の心臓も同調するように同じリズムを刻み始め、歩くりズムも自然と一緒になっていた。

「なあ……美咲」

「何？」

「俺は犬扱いか？」

「ジョンは私のワンちゃんなんだから当然でしょ」

これまた有無も言わせない迫力で言い切った美咲だが、その様子あまりにもおかしくて俺は吹き出していた。しかし、美咲もおかしかつたらしく互いに顔を見合わせて一緒になつて笑い、繋いだ手をそのままに家路へ着いた。

朝 いつものように窓を開けて、外の空気を取り入れていると向かいから元気な声が聞こえてきた。

「おはよう、ジョン！」

「……はいはい、おはようございます」

すでに窓枠に足を掛けで待機していた美咲は身軽に俺の部屋へ入ってきた。

「どうして、そんな挨拶しか出来ないかなあ、ジョンは」
不満そうに俺の顔に手を添えて唇を尖らす美咲。
「別にいいだろ？ 寝起きはいつもこつなんだよ」

「それなら……『目』覚ましてあげる」

言つが早く俺の顔に近づいてくる美咲の顔、次いで塞がれる唇。昨日よりも長く、より熱く、そう感じる時間が心地よかつた。

「……『目』覚めたでしょ？」

「あ、ああ……」

少し赤く染まつた頬を向け、俺を見つめる美咲は満足そうに頷いていた。

「それよりも、早く着替えないと学校に遅れるよ。ほら、早く早く

」

俺の背中を押して促す美咲に苦笑しながら、制服を手に取つて着替え始めた。無論、うしろから悲鳴に近い声が聞こえて部屋から飛び出していくのを吹き出すのを我慢しながら見ていた。

「そんな事ばかりしてると、おはよつのキスはジョンにしかしてやらないんだからっ」

「つまり、『ジョン』とするのはスキンシップって事が？」

「そ、そうよつ。洵とおはよつのキスをしてるんじゃないからね。これはご主人様からの愛の証よ」

そんな声が廊下から聞こえてきてとつとう我慢できずに吹き出していた。

「な、なんで笑ってるのよつ」

「俺は美咲とキスがしたいんだけどな……。『洵』とはしてくれないのか？」

「もうつ、ジョンのばかっ」

俺と美咲の関係もどこか变なのは分かっているが今はこのままでいい。俺は美咲の良き幼なじみで飼い犬つて事で……しかし、い

つかは俺の気持ちを伝えたいと思っている。

「絶対に、洵にはしてやらないんだからねっ」

ただ、俺の予想とはどうにも違う方向に進んでいる気がしなくな
いけど、これはこれで楽しいからいいとするか。

「ほら、急いでよ ジヨンっ」

「はいはい……今行きますよ、ご主人様」

もう少し、『ジョン』で頑張つていくとしますかね……。

(後書き)

久しぶりに企画小説に参加しました。

そして久しぶりに小説を書いたので書き方を半分ほど忘れている始末。情けない……。

色々とおかしなところがあるとは思いますが、最後まで読んでいただきありがとうございます。

それでは、次回も頑張りますのよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0684c/>

俺の名前は潤と書いて『ジョン』と読むらしい。

2010年10月8日15時20分発行